

概要

2011年3月11日に発生した東日本大震災で、甚大な被害を受けた福島県浜通り地区。10年以上が経過した今、避難指示区域の解除も徐々に進み、政府は地域住民の生業の再建や企業誘致に着手し始めていて、復興の兆しが見えてきた。

一方で、地域住民の心に潤いを与えるべく、芸術・文化を通じた地域活性化のイベントとして、「福島浜通りシネマプロジェクト」を映画24区が企画。具体的には、映画や演劇で新たな彩りを地域にもたらし、その魅力に惹かれる若者たちが集う流れを作っていきたい——。そんな思いから、まずは映画や演劇界の第一線で活躍する映画監督や俳優を福島浜通り地域に招聘。地元市民や全国から集まってきた子どもたちと共に、映画というモノづくりに触れることで、将来のまちづくりを考えるきっかけにつながっていれば、と。

と同時に、世界に負けない作品づくりに向けて、働く人々の環境面や人材育成面などにも積極的に目を向ける。それが結果的には、福島浜通り地域の魅力発信と、映像文化産業の課題改善を掛け合わせた地域発展になるのではないだろうか。

そんな高い志の下、そのモデル例になるべく2022年夏、「福島浜通りシネマプロジェクト」を開催。3泊4日を双葉町で過ごしながらかつて映画をつくり、無事上映会までこぎつけ大成功を収めた。だが、たとえどれほど意義のあるプロジェクトであろうとも、継続されなければ意味がない。前回から継続して参加するメンバーも含めて、今回も全国各地から高校生＆若者たちが集まり、2024年1月18日～21日、復興作業が着々と進んでいるのを肌で感じられる双葉町周辺で、およそ1年半ぶりに「福島浜通りシネマプロジェクト2023」が開催された。



双葉駅前の華やかなイルミネーション



ごあいさつ
三谷一夫

皆さんこんにちは。「福島浜通りシネマプロジェクト2023」の全体の統括というポジションを務めております、映画24区の三谷と申します。

2011年3月11日に東日本大震災が発生してから13年の月日が経ちますが、あの日以来、福島県双葉町では雨の日も風の日も休むことなく復興作業がずっと続いています。この街を、人が集い、再び住めるような状態に戻すことができるのか。この地にもともと住んでいらした方は各方面に避難されていますが、多くの方がお戻りにはならないそうです。ですから「新しい街」としてどんなふうにも復興を遂げていけるかなんですね。

経済産業省をはじめ、国を挙げた事業として様々な取り組みが行われるなかで、映画業界で働いている私たちにも何が貢献できることはないだろうか。そう考える中で、「福島浜通りを映画の街にする」と言ったら大げさかもしれませんが、将来、芸術の道を志す若い人たちが、この地でモノづくりに体験することをサポートするぐらいなら、

私たちにでもできるのではないかな。ならばまずは短期間でプロの映画スタッフや俳優と若者たちが寝食を共にしながら、一緒に「映画づくり」に挑戦してみるのはどうだろう。そんな思いでスタートしたのが、「福島浜通りシネマプロジェクト」です。

一昨年の夏に経済産業省との共催で第1弾が実施され、今回は2回目の開催となります。本企画は、シナリオハンティングや脚本作りから始まり、撮影や編集作業を経て、最後は上映会や舞台挨拶までやってみようという大変な取り組みです。参加者にとっても、スタッフにとっても濃厚で充実した、人生において忘れられない4日間となることでしょう。100年を超える歴史をもつキネマ旬報の映画人材ネットワーク、そして映画24区による映画人の育成ノウハウを活用した福島浜通りの街づくりの今後の展開にも、ぜひご期待ください。

みに・かずお／映画24区代表。映画スクールを運営する傍ら、映画・ドラマ・CMなどの企画・制作および配給を手掛ける。近年は全国の自治体と組んだ映画プロジェクトに数多く携わる。



表紙イラストレーション

向田優

きっと参加するにはそれぞれの想いがある。空高く飛ぶ鳥、寒風吹く中での本番の声……イラストの英字には「今を楽しもう。良い思い出にしよう！」と込める。10、20代の僕にとって、絵を描く事は、自身の感情や迷いを伝える大切な表現方法だった。参加者は福島県双葉町に集まり、映画を通じて、繊細で熱く、伝えてくれた。ありがとう。第1弾の夏に続き、第2弾の冬……そして、第3弾？ イラストのこの先の物語が楽しみです。

むかだ・ゆう／2023年公開、窪塚洋介主演映画「Sin Clock」(牧賢治監督)の助監督を担当。映画24区の青春映画制作プロジェクト「ぼくらのレシピ図鑑」の、安田真奈監督「36.8℃ サンジューロクドハチブ」(18)「メンドウな人々」(23)で助監督、池田エライザ監督「夏、至るころ」(20)でアシスタントプロデューサーを務める。映画「フィリピンパ嬢の社会学」(24・白羽弥仁監督)ではプロデューサーを担当、「ソレダケ that's it」(石井岳龍監督)ではコミック・アニメ・題字作画も手がける。2023年春には個展「脳内BEAM」を開催、アーティストとしても活動中。

スタッフ紹介



リーダー

市井昌秀

いちい・まさひで／1976年生まれ、富山県出身。2004年に初の長編作品「隼 (はやぶさ)」が第28回ぴあフィルムフェスティバルにおいて準グランプリと技術賞のW受賞。代表作に「箱入り息子の恋」(13)「ハルチカ」(17)「台風家族」(19)「犬も食わねどチャーリーは笑う」(22)など。

サブリーダー

北林佑基

きたばやし・ゆうき／1996年生まれ。大学受験に失敗し、双子の劣等感に苛まれるなか「自分には勉強以外の才能がある」と決めつけ、映画の世界へ。出演作に「#平成最後映画」、「エッシャー通りの赤いポスト」(21)、監督作に「恋愛電話」(16)「THE TEALLS-クオルテ・トルチュの攻防-」(「夜が明けるまで」(19)「咲かない蕾」(22)、原案・共同脚本を務めた「消しかすの花」(21・小池匠監督)では、京都国際映画祭2021で優秀賞など多数受賞。

撮影スタッフ

岡将史

せき・まさふみ／主に映画、ドラマ、CM等の作品にカメラマンとして参加。撮影担当作品に、市井昌秀監督の「無防備」(09)「僕らのごはんは明日で待ってる」(「ハルチカ」(17)ほか、吉田浩太監督の「Sexual Drive」(22)「スノードロップ」(24年公開予定)、大野大輔監督の「さよならエリュマントス」(23)、平波巨監督「サーチライト 遊星散歩」(23)など。

撮影サポート

堀春菜
撮影サポート&車両 芝博文



リーダー

吉田康弘

よしだ・やすひろ／1979年生まれ、大阪府出身。同志社大学卒業。2007年、大竹しのぶが型破りな母親を演じた映画「キトキト!」で監督デビュー。代表作に、「旅立ちの島唄〜十五の春〜」(13)「かぞくいろー RAILWAYS わたしたちの出発ー」(18)、小津安二郎の傑作をリメイクするシリーズ連続ドラマW「OZU〜小津安二郎が描いた物語〜「生れてはみたけれど」」(23)を監督。

サブリーダー

板野侑衣子

いたの・ゆいこ／2000年生まれ、岡山県出身。同志社女子大学卒業。まずだあやと共同監督した「魚の目」が2022年公開。第24回京都国際学生映画祭で最優秀審査員賞(行定勲賞)受賞、第15回田辺・弁慶映画祭でキネママスター賞を受賞。

撮影指導

鈴木周一郎

すずき・しゅういちろう／東京都出身。撮影技師の藤澤順一、柴主高秀の現場を経て、佐々木原保志に師事、現在に至る。主な撮影担当作品に、三原光尋監督「高野豆腐店の春」(「オレンジ・ランプ」(23)、雷樫森監督「ふたりごっこ」(23)、前田哲監督「大名倒産」(23・Bcam)など、テレビドラマに松本佳奈監督「コタローは1人暮らし」(21)『大川と小川の時短捜査』(22)、柴田啓佑監督『佐原先生と土岐くん』(23)など。

撮影サポート

高橋朋美
撮影サポート&車両 四宮義斗



スーパーバイザー/メイキングディレクター

永田琴

ながた・こと／大阪府出身。2004年、オムニバス映画「恋文日和」で劇場公開デビュー。監督作品に「シャンティ デイズ 365日、幸せな呼吸」(14)「いけいけ!バカオンナ 我が道を行け」(20)など、テレビドラマに東野圭吾原作『分身』(12)『変身』(14)『片想い』(17)や『東京ラブストーリー 2020』(20)、NHK BSプレミアム『ライオンのおやつ』(20)。子どものための映画ワークショップ「えいがっこ!」を主催。

録音指導

石寺健一

いしでら・けんいち／映画録音技師。多くの映画でサウンドクリエイターとして活躍。2009年公開の木村大作監督作品「劔岳 点の記」で第33回日本アカデミー賞最優秀録音賞を受賞。その他、「追憶」(17)「散り椿」(18)「かくや様は告げたい 天才たちの恋愛頭脳戦」(18)「きみの瞳が問いかけている」(20)「GET OVER JAM Project THE MOVIE」(21)「Still Dreamin' 布袋寅泰 情熱と栄光のギタリズム」(「チェリまほ THE MOVIE 30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい」(「ホリック xxxHOLiC」(22)、配信映画「HOME STAY (ホームステイ)」(22)など。

本部サポート

三谷一夫、青明実、向田優、董敬、高藤まりこ
有田あん、本間淳志、文屋敬
長谷川哲也、三浦理高、星野晃志

■取材・文・撮影=渡邊玲子 ■撮影=スタッフ・サポートメンバー
■デザイン=島岡進(キネマ旬報社) ■編集=キネマ旬報社

4日間のタイムスケジュール

1.18 Thu	1.19 Fri	1.20 Sat	1.21 Sun
7:00	朝食	朝食	朝食
8:00			
9:00	脚本づくり 撮影	撮影	編集 発表準備
10:00			
11:00	オリエンテーション		
12:00	昼食	昼食	昼食
13:00	昼食		
14:00			
15:00	撮影	撮影&編集	上映発表会 振り返り
16:00	ロケハン 脚本づくり		
17:00			
18:00	夕食	夕食	夕食
19:00			
20:00	脚本づくり 撮影準備	編集	編集

オリエンテーション

映画芸術を活用した魅力あるまちづくり計画を中長期的に見据えた「福島浜通りシネマプロジェクト」。そのイベントとして2022年の夏に経済産業省と映画24区の共同事業として実施された第1弾に続き、2024年1月、経済産業省のサポートの下、映画24区主催により、およそ1年半ぶりに第2弾が企画された。今回は、日本全国から集まった18歳から25歳までの若者たちが、映画監督やプロのスタッフ、俳優と共に双葉町で映画づくり体験に挑戦。10人の若者たちが奮闘する姿をレポートする。



双葉町の新たな名所！糸工場・タオルショップ・カフェの機能を兼ね備えた浅野燃糸の複合施設「フタバスーパーゼロミル エアーカーおる双葉丸」

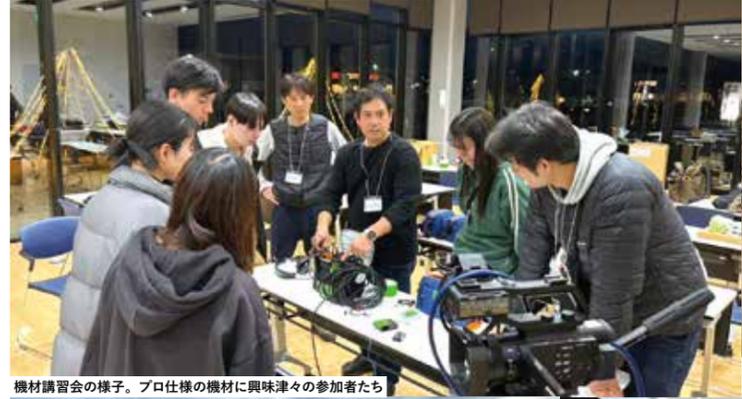
無謀な試み!? 3泊4日の映画制作スタート

オリエンテーションは、糸やタオル製品で双葉町の復興・発展を目指すべく、2023年4月に新設された浅野燃糸株式会社の工場「フタバスーパーゼロミル」2階の会議室で行われた。参加資格が中学1年生～高校3年生までに限定されていた前回から年齢層が若干上がり、今回の参加メンバーは、「震災や復興のことを考える良い機会になれば」と語る福島県津波若松市出身の23歳の女性や、2022年の第1弾に続いて2度目の参加となった新潟県在住の高校3年生など、全国各地から集まった18歳から25歳までの、俳優を志す男女10人。「前回のプロジェクトにサポートスタッフとして参加したことで、さらに映画作りへの関心が高まり、今回は体験する側として京都から再び参加した」という人もいれば、「1週間前に欠員募集の連絡を受け、期末レポートの提出期限と重なり参加するか悩んだが、貴重な機会を逃したくないと思い、担当教官にも相談の上なんとか頑張って仕上げてきた」と裏事情を明かす大学生の姿もあった。人の姿がほとんど見られなかった頃の双葉町を知る前回の参加者たちは「町のあちこちで工事が行われており、復興の兆しを肌で感じる」と感想を語っていた。



Bチームのオリエンテーションでは参加者が持ち寄った小道具も披露

まずは、「映画がどのような行程で作られているのか」を学ぶべく、映画監督の永田琴スーパーバイザー(以下、SV)による「映画づくり講座」を実施。「脚本」「キャスティング」など、参加者から挙がる項目をホワイトボードに書き出しながら、「とにかくお金が集まらないことには何も始まらない!」「お金が一番大事!」と力説。企画開発から公開まで、(宣伝期)を除くすべてをたった3泊4日で体験しようとするこのプロジェクトが、いかに無謀で、しかし壮大な試みであるかが明らかになった。



機材講習会の様子。プロ仕様の機材に興味津々の参加者たち



浅野燃糸工場のロビーに設置された「双葉中学校 復活のピアノ」



Aチームは浅野燃糸工場内も見学



ロケハンで海へ。かつて「双葉海水浴場」は環境省の海水浴場百選にも選ばれた



連想ゲームのように脚本づくりを進めるBチーム



双葉町の神社をロケハン



流木を引っ張り合うAチームの市井リーダーと撮影指導の関氏



高低差を活かしたカメラアングルを探る



「映画づくり講座」で熱井をふるう永田琴スーパーバイザー



※本地図は「双葉町の復興が見える地図」を引用しました。地図発行：双葉町

学生 & 若者たちの冬の映画づくり体験

ロケハン&脚本づくり

1日目:各チーム、正反対のプロセスでロケハンをスタート

全体オリエンテーション後は、A・B 2班に分かれて別行動を開始。「映画づくりにおける一番の原動力は、“好き”とか“楽しい”という気持ち。真剣に映画と向き合って、“好き”や“楽しい”を炸裂させてくれたら」との思いから、「安全・安心第一」「少数派を否定しない」「常識を疑う」という方針のもと、参加者たちが自主的に意見を出し合うのを見守る姿勢を貫く市井昌秀リーダー率いるAチームと、「全国から双葉という土地に集まり映画づくりを体験すること自体に大きな意義がある。“震災”や“復興”というテーマに縛られることなく、自由な発想で作ろう」と呼びかけた上で、「青空が撮りたいならチャンスは明日のみ」「朝焼けが撮りたいなら明朝6時」と、4日間で完成させるために必要な情報や選択肢をその都度提示しつつ、できるだけ効率よく進めていくスタイルを取る吉田康弘リーダー率いるBチーム。

「下の名前やニックネームで互い呼び合うことで、立場や年齢の壁を取っ払い、チーム一丸となって作品を完成させる」という点では同じだが、ロケハンから脚本づくりを経て撮影、編集に至るまで、各チームが辿ったプロセスは“正反対”とも言えるほど大きな違いがあった。

“五感”を働かせながら、海や神社、廃校となった小・中学校、駅周辺を一通りロケハンし、各自持ち寄った小道具や衣裳を部屋に広げ、アイデアを付箋に書き出し、連想ゲームのようにイメージを膨らませながら脚本の土台づくりを進めていったBチーム。それに対し、Aチームは、演劇のワークショップさながら、参加者がロケ候補地でスタッフを相手に即興で演出。チャンバラをする横で、男二人が流木を引っ張り合い、コンテンポラリーダンスを踊る……といったシュールな動画を撮り、それを基に大喜利をするなど「脳トレ」を繰り返していく。

機材講習会では、カメラや録音機材の基本的な操作方法や「カチンコ」の打ち方を教わった。

2日目:ハプニングも脚本に取り込む!? いよいよ撮影開始

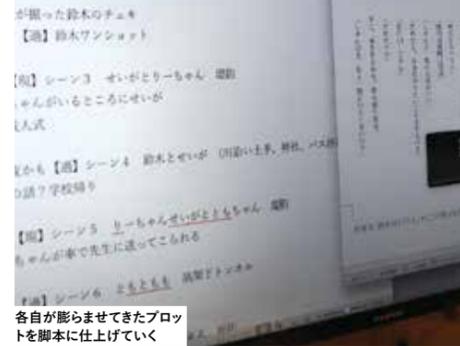
役割は固定せず、出演していないメンバーが監督やカメラ、マイクをシーンごとに持ち回りで担当することになったBチームは、ある程度まで固まったプロットをベースに「自分が演じる役がオイシくなるように」と各々膨らませてきた案を持ち寄り、いよ

いよ脚本づくりへ。吉田リーダーからの「映画は“掴み”が重要」「余白を作って観客に想像させる」「色味の違いで時制の変化を表現する」といったアドバイスのもと、設定やセリフをブラッシュアップさせつつ、シーンごとに分担を細かく決めながら撮影プランを組み立てていく。

一方、Aチームは、「映画とは——」といった哲学的な問いと向き合い濃密な「脳トレ」を継続中。「スーツケースひとつにも人間性が出る。キャラクターを特徴づける小道具として使える」といった意見を出しながらも、参加者5人がいかにこの混沌とした状況を、自分たちの力だけで打ち破れるか——。その時が来るのをひたすら辛抱強く待つ市井リーダー。何かひとつ決まれば一気に動き出しそうな気配もあるなか、「Aチームの部屋に突然Bチームのスタッフが間違えて入ってきた」という現実起きたハプニングが突破口となり、そこから「出張でやって来た男がホテルの部屋を間違える」というアイデアに繋がることもあった。

脚本が上がったら、現場進行の向田優氏をはじめとする本部スタッフを中心に撮影プランが練られ、撮影や録音のテクニカルスタッフを配置。タイムスケジュールを組んでいく。本部スタッフが手分けして車止めを行うなか、「叫びながら全力疾走する女子高生の横顔」を車両で並走して撮影するという、映画づくり初心者には難易度高めのシーンからクランクインすることになったBチーム。吉田リーダーが撮影における専門用語を説明しながら撮影手法をいくつか提案。撮影指導の鈴木周一郎氏のアドバイスのもと、メンバーがベストのショットを決めるなか、「最初からパワー全開で演じる必要がある人のために、まわりも全力で応援することが大切」との吉田リーダーの教えに従い、監督を務めた小林星冴さんが、全力疾走する女子校生役の細谷桃子さんとウォーミングアップをする姿が印象的だった。車と人のスピードを合わせるのに苦戦して何度かテイクを重ねた後、ロングショットを撮るべく、産業交流センター屋上からトランシーバーでディレクション。続く土手上の撮影では、強風が吹きすさぶ中、全員納得がいくまで粘り、駅前に移動してのナイト撮影では、部活帰りに友だちと肉まんを買い食いする高校生を演じた板井草平さんによる「テストなのに思わず食べてしまう」というハプニングが笑いを誘った。一方、Aチームは、夕方駐車場全員そろってウォーミングアップを行い、午後8時からホテル内で遂に撮影が開始された。

Team B



各自が膨らませてきたプロットを脚本に仕上げていく

吉田リーダーと撮影指導の鈴木氏による手厚い指導の様子



クランクイン直後のBチーム。車両を使い並走シーンを撮影する



強風が吹く中、日没ギリギリまで粘って撮影するBチーム



撮影を控え笑顔でコミュニケーションを図るBチームのメンバー



カチンコに手に微笑むBチームの鈴木智恵さん

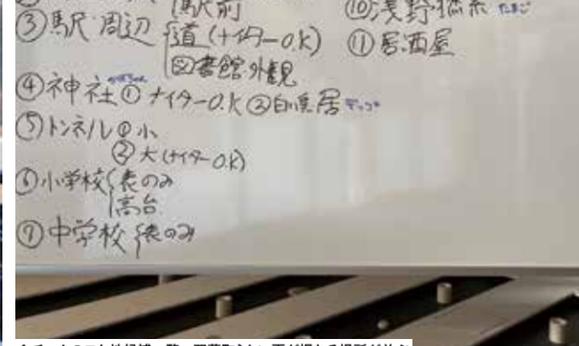


Bチームは持ち回りでカメラや監督、役者を担当



双葉町駅前ではナイトロケにも挑戦!

Team A



Aチームのロケ候補地一覧。双葉町らしい画が撮れる場所が並ぶ



「映画とは何か」をどことなく突き詰めるAチームのメンバーたち



ホテルの部屋で撮影準備を進めるAチーム



カチンコとジャンパーがベストマッチ! Aチームの魚井健太郎さん

3日目：早朝撮影に深夜編集 映画制作のクライマックス

朝焼けの海を撮影するため、Bチームのメンバーとスタッフは午前6時前に出発。暗闇のなか全員で円陣を組み「安全第一。(暗くて寒くて)不安だと思うけど、何かあればすぐに周りのスタッフに言うように。映画は一人では作れない。最初からで全力でやろう。頑張れば2時間後には終わる。気合入れていきましょう！」と吉田リーダー。東の空が徐々に白み始めるなか、「卒業以来2年ぶりに集まった高校の同級生4人が、卒業目前に世界した“鈴木しゅん”への想いを海に向かって叫ぶ」クライマックスシーンを撮影。人員配置上、鈴木役の板井さん自ら手持ちカメラで撮影を行うという、なんともエモいシーンになった。

Aチームは初の外ロケ。これまで屋内撮影が続いた参加メンバーの表情にも笑顔が覗く。全員が持ち回りですべてのポジションを担ったBチームに対し、Aチームは「ヘヴン監督」こと、片嶺穂乃佳さんが全編一人で監督を担当。「パリ五輪を目指すランナー」役も兼任した片嶺さんは、メイキング撮影を担う永田琴SVから「必勝ハチマキ」に緑のマジックで「パリ」と書き入れてもらい、気合十分！魚井健太郎さんは、出張先のホテルでシャワーを浴びようと服を脱ぎ風呂場に足を踏み入れた途端、浴槽に隠れていた泥棒とその元恋人と鉢合わせ。バスタオルを腰に巻き全速力で泥棒を追いかける設定の男役を、文字通り体を張って演じた。このシュールな逃亡&追跡シーンは、列車の通過時刻に合わせて撮影するため、チャンスは上りと下りの2回のみ。1回目はタイミングがうまくいかなかったものの、永田SVが線路の付近から列車接近の合図を出す係を務め、2回目で無事成功。ヘヴン監督が「完璧！」とキャストに呼び掛け、市井リーダーからも「よかったよ！」と称賛が飛び出した。

その後、満潮が迫る海辺に移動して、波打ち際に出演者が横一列に並び、手をつないで海に向かって深々と一礼するシーンの撮影に。最後はサポートスタッフも機材を片手に全員カメラの前にフレームイン。「祝祭」というタイトルに相応しい大団円を迎える展開に——。役者のみならずマジシャンの顔も持つ魚井さんが、裸にバスタオル姿から打って変わって緑色の衣裳とサングラスをまとい、カメラの前でカードマジックを披露するシーンも撮り終えた。

参加者たちが慣れない撮影に奮闘する裏側では、本部スタッフたちが常に連携を取り合い、昼食に加えてお汁粉やホットチョコレートなどのおやつを絶

妙なタイミングで差し入れ。編集室に用意されたお菓子も、“テッパン”とされるアルフォートに加え、小分けになった塩系スナックなどバリエーション豊かな品揃え。ちなみに、ドライバーを担当した本間淳志氏と本部サポートの有田あん氏は現役の俳優で、同じく本部サポートの高藤まりこ氏にもかつて役者として活動していた経歴がある。俳優経験のあるスタッフがサポートすることで、参加者たちの不安も解消されたに違いない。もともと芸人出身、演技経験もある市井昌秀監督率いるAチームと、助監督からキャリアをスタートさせた吉田康弘監督率いるBチームという、各チームのリーダーを務める監督の出自の違いが、それぞれの映画づくりのプロセスに大いに影響しているように見受けられた。

夕食後、Bチームの編集作業がスタート。その日撮り終えた素材を全員で見渡すことに。「なんだか昔の台湾映画みたい」とは吉田リーダーの弁。自らが演じる姿を目にした参加者は「瞬きが多いな」「リュックを背負い忘れた！」など次々と感想が上がるなか、ワイヤレスマイクがうまく作動しておらずアフレコが必要なシーンも。「プロの現場でも1日で撮られて10分程度。30秒のCMを撮るのに2~3日かかることもある」と聞いた参加者たちは、「つながりをイメージしつつ、編集しやすいように考えて撮ることが大切」と学んだ。一方、Aチームは室内や廊下で撮影を続行。Bチームは深夜まで編集作業が行われた。

4日目：追加撮影にアフレコ エンドロール制作と怒濤の編集

4日目。朝から、一歩外に出るや一瞬で傘が壊れてしまうほどの暴風雨に見舞われた双葉町。永田琴SVによる編集講習会からスタートしたAチームは、そのまま編集を続ける班と、追加撮影をする班との二手に分かれて、急ピッチで作業を進めていった。Bチームは、吉田リーダーと編集サポートの董敬氏が繋いだ映像に、録音技師の石寺健一氏が音を合わせる作業が続く中、アフレコや効果音の収録を行い、全員会議によりタイトルも決定。その後も、向田氏と共にエンドロールに使用するインスタント写真をセレクトしながら、板野サブリーダーから提案された使用楽曲を確認するなど、上映会に間に合わせるべく同時進行で仕上げ作業を行った。俳優志望の参加メンバーたちが、短期集中で映画づくりのすべての行程を駆け足で体験するなかで、確実に視野が広がり、成長していくのが彼らの真剣な眼差しから見て取れた。

Team A



満潮の迫る海岸で一列に並びクライマックスシーンを撮影するAチーム



撮影中のAチームを横から記録するメイキングの永田SV(右)



役者でマジシャンでもあるAチームの魚井さん。華麗なるカード捌きを披露



列車の通過タイミングに合わせての撮影では失敗できない怖さも



“鈴木しゅん”役を演じる板井草平さんを狙う



撮り終えたばかりの映像をモニターでチェック。「必勝ハチマキ」で気合十分のAチームの片嶺監督



早朝の双葉海水浴場



寒い早朝の撮影でも温かい飲み物のおかげで笑顔になるBチームの参加者たち



Aチーム「祝祭」の大団円のシーン。キャスト・スタッフ入り乱れての歓喜の舞



編集作業で自らの芝居を客観的に見つめる俳優志望の参加者たち



制服も自分たちで持ち寄り、青春映画のシーンを撮り進めていく

作品完成&上映会

双葉町の復興・発展が
実感できる2作品が完成!

最終日。怒濤の4日間を締めくくる上映&発表会が、双葉町産業交流センター大会議室にて開催。あいにくの悪天候にもかかわらず、双葉町の住民や撮影に協力した関係者らで会場が満員になるなか、完成したばかりの素材が届けられ、予定より遅れて上映会がスタート。

各チームともに開始ギリギリまで追加撮影やアフレコ、編集作業を分担しながら行っていたため、チームリーダーでさえ「どのように仕上がったか知らなかった」という状況のなか、会場にいる誰もが固唾を呑んで鑑賞。まったく異なるプロセスを経て生み出



Team A

「祝祭」
(25分)

制作/片嶺穂乃佳、日高真優、板澤桃香、川野諒太、魚井健太郎

サポートスタッフ/市井昌秀、北林佑基、関将史、堀春菜、芝博文

STORY 会社の研修でホテルに滞在中の男の部屋に、情緒不安定気味の恋人や泥棒、泥棒の元恋人が次々と忍び込む。男が部屋に戻り、シャワーを浴びようとしたところ、風呂場に隠れていた泥棒らと鉢合わせ。一目散に逃げ出す彼らをタオル一枚の姿の男が追い、やがて海へ。



された、まったく異なるテイストの作品にもかかわらず、奇しくも「出演者全員が浜辺に揃う」という着地点を持つ2作品に、盛大な拍手が贈られた。

上映後、舞台上に登壇した参加者それぞれが、充実した面持ちで作品への思いを語った。終了後には参加者・スタッフが車座になり、4日間を振り返っての1分間ずつスピーチ。それぞれの内なる思いを知り、「双葉町」の美しい風景や出会った人々にインスパイアされて生まれた作品こそが、復興・発展への確かな礎になるであろうことを実感できた瞬間だった。堤防の内側に植えられた小さな海岸防災林が、映画づくりをスタートさせた参加者たちとどこか重なるようでもあり、いつか大きく成長した姿をまた見たいと思わずにはいられなかった。



Team B

「かえってきた、キリン」
(16分)

制作/細谷桃子、中澤莉胡、小林星冴、鈴木智恵、板井草平

サポートスタッフ/吉田康弘、板野侑衣子、鈴木周一郎、高橋朋美、四宮義斗

STORY 高校卒業から2年。卒業間近に早世した鈴木しゅんを偲び、同級生4人が海辺で遊返する。在りし日のしゅんとの思い出がよみがえり、ありったけの想いを海に向かって叫ぶ4人。その日、記念に撮ったインスタント写真には、彼らを見守り続けるしゅんの姿があった。



永田琴Sによる編集講習会の様子

エンドロールに使用したインスタント写真をセレクト

「祝祭」のイメージキャラクター「フタバくん」

参加者・スタッフが車座となつての1分間スピーチ



参加者の言葉

Question: ①自分にとって、映画とは? ②プロジェクトに参加した感想

Team A

魚井健太郎

①人の心を動かし、養うために必要なかけがえない大切な娯楽。
②今回、初めて参加させていただき双葉町の今の姿、あの時の爪痕を肌で感じることができました。僕のちっぽけな想像力ですが忘れてはいけない事や震災前にたくさんの人が住んでいた時の風景を想像しつつ今回の4日間で映画を作るとしてもタイトで濃密な時間を過ごせた事に感謝しています。役者として今後もやっていきたいと再度実感し、リーダー含めスタッフの方が僕達のために命を燃やし真剣に考えてくれる姿に感動しました。皆さんありがとうございます。次は現場で会いたいです!

片嶺穂乃佳

①救いです
②実際に訪れるまで「震災」のイメージしかなかった双葉町ですが、実際に足を踏み入れることで双葉町のもつ自然の豊かさ、雄大さを体感しました。さらに震災の爪痕をこの目で見たことで、情報としてしか知り得なかったさまざまなことを、自分の生活と地続きなものとして認識することに繋がりました。わたしは震災の当事者ではないけれど、だからそこそこで暮らしていた人たちがいたことや、これからこの町が向かっていく先を一緒に見つめていきたいと思うようになりました。初めて会う人たちと4日間一つのものを作りあげるといふ経験は、自分にとって大きな財産になりました。大変なこともたくさんありましたが、全ての瞬間が愛おしく、かけがえないものになったのは、この場所でお会いした皆さまのおかげだと思います。これからどんどん変わっていくであろう双葉町の今の姿を映画の中に刻めたのも、とても貴重なことだったと思います。出来上がった作品を見て、改めて、自分たちはこんなことが描きたかったのか、と気づくこともありました。本当ならあと一日、あと一週間ここにおいて、まだまだみんなと映画を作っていたかったです。これほどものづくりに夢中になれる時間を過ごせたのも、周りで支えてくださったチームのみんな、スタッフの方々がいてくれたからです。毎日三食温かいご飯が食べられたことも、撮りたいと思った場所にスムーズに移動できたことも、機材が毎日ちゃんと揃って現場にあることも、本来当たり前にあるものではないはずで……。見えないうちでもたくさん動いてくださった人たちがいたことを、誰に伝えて良いかわからず、ここに書かせていただきました。改めて、このプロジェクトに関わってくださった全ての皆様から心からお礼申し上げます。この企画がこれからも続いていくことを願っています。本当にありがとうございました。



川野諒太

①勉強。作り手のいろいろな想いを感ぜられるから。
②双葉町は被災して何もかも失ってしまい、何も無くなってしまった町だと思っていたが、復興を目指し変化し続ける、生命力のある力強い町だった。本当に貴重な経験をさせていただきありがとうございます。映画が好きになり、双葉町が好きになりました。



板澤桃香

①自分の人生を豊かにしてくれるもの。いまの人生では味わえない感情を体験させてくれるから。
②この合宿を通して、演技の技術という部分ではなく、核心について触れたなどと思っています。みんなと、自分の意見や思っていることをぶつけて、話し合い、理解し合って。そうすることで視野が広がったと感じます。きっとこの経験が糧になる日が来ることも願って、また改めて様々な視点から映画を観たり、演技をしったりすることを試みたいです。



日高真優

①ワクワクするもの。家の近くの映画館で面白そうな作品が上映されていると思わず吸い込まれてしまう。
②行く前は、震災の時に被害を受けた場所という漠然としたイメージしかなかったのですが、実際に行ってみると、復興のために動いている人がいるのだという、人の温度感などが伝わってきた、これからきっと活気で溢れていく場所なのだろうと感じました。特に、町の至る所にアートがあり、双葉町を盛り上げていこうという思いを肌で感じました。まずは、4日間一緒に映画を作り上げたメンバーに感謝の気持ち



Team B

細谷桃子

①モチベーションを上げてくれるもの。
②澄んでいて広い空、力強い波を肌で感じ、美しい自然が残る双葉町を好きになりました。また行きたい町です。スタッフや参加者皆さんが優しく面白く、安心して過ごせる環境がありがたかったです。とても幸せな4日間を過ごせました。



板井草平

①悩み事ができたときに観るもの。映画を観て、こういう人生もあるんだなと学べるもの。親と喧嘩した時は「誰も知らない」を見て、この親よりはマシだと思えるようにしている。
②とても楽しかったです。ありがとうございます!また開催される際は参加したいです。



小林星冴

①まだわかっていないので、この企画を通じてヒントが得られたら。
②双葉町からは自然と芸術の風景が感じられ、美しく、魅力的な場所である



印象を新たに持ちました。また開催される場合は、必ず参加したいと思っています。

鈴木智恵

①いい意味で現実逃避させてくれるもの。
②時間が震災の時のまま止まっている場所もあったけれど、新しい建物が建っていたり、工事がずつと行われていたり、復興へと進んでいる面もあることを実感しました。今回、本当に貴重な時間を過ごさせていただきました。4日間という無謀なスケジュールで映画制作をしたけれど、その時間の制約があったからこそ一瞬一瞬を集中して取り組めたのではないかなとも思いました。そして、双葉町の皆さん、支えてくれた監督スタッフの皆さんと一緒に取り組んだ参加者の皆さんにとっても感謝しております。また参加したいですし、自分でも映画を作りたくなりました。ありがとうございます。



中澤莉胡

①自分の人間性をレベルアップさせてくれるもの。いろんな映画を観ることで自分の価値観や視野が広がるから。俳優志望なので、心に響く作品を作るためにもいろんな映画を観て引き出しを増やしたい。
②今回は募集年齢が前回よりも高く、さらに濃い時間を過ごすことが出来ました。多くの人と関わることができ、プロの人のやり方を間近で4日間も見ることも出来ました。俳優志望の私にとっても貴重な経験です。完成した映画に映っている工事中の風景が、建物が立ち並ぶ風景に変わっていくことで、復興した浜通りをさらに感じる事が出来ると思います。また参加したいです。



怒濤の4日間を無事に乗り切ったすべてのメンバー揃っての記念撮影

Fukushima Hamadori
Cinema Project 2023



経済産業省

福島12市町村学生アート制作プロジェクト

キネマ旬報企画 映画24区

地域プロデュース事務局

TEL:03-6264-3880

公式 HP : fukushima-cinemaproject.jp